

地域の様子を知る

5 伝建地区の社会構造 セクション3:ローカル・アイデンティティ

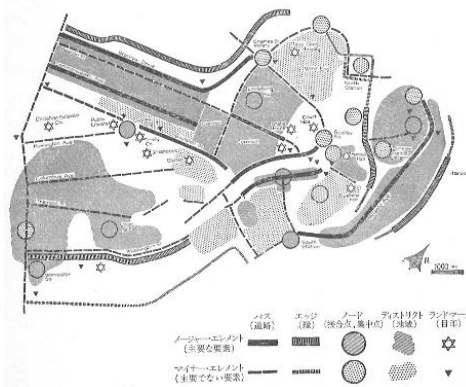


図1 リンチによる「ボストンの視覚的形態分析」¹⁾

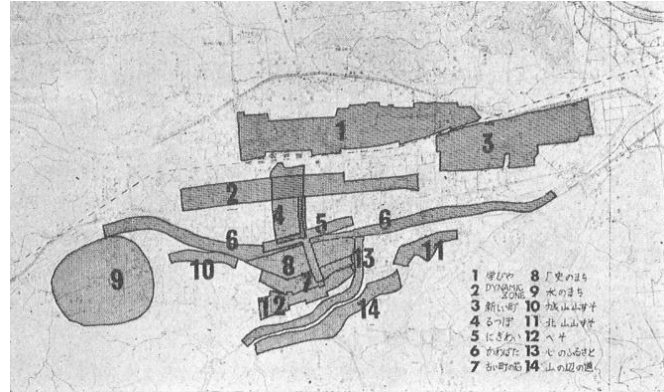


図2 田中による飛騨高山 district 分析²⁾

都市や地域に愛称をつけることは古今東西で行われ、古都、花の都、杜の都、水の都など、枚挙にいとまがない。また近年では市民が自らの住む町への愛着や誇りを表した言葉としてシビック・プライドが挙げられる。

戦後、建築・都市計画分野で地域景観のアイデンティティを分析した先駆的研究としてケビン・リンチの『都市のイメージ』(初版 "Image of the City" MIT Press, 1960)が挙げられる。リンチは既存の地域景観を人々が如何に認識しているか、景観を構成する主要要素を紙の上に記号として落とし込み、景観の構造を捉えようとする。リンチの研究は認知心理学的な手法を都市・建築分野に持ち込んだ画期的な先行研究で、1960年代末のデザイン・サーヴェイの理論書として位置づけられる。例えば1968年、都市計画家・田中滋夫はリンチの手法を応用し、図2の如く、飛騨高山の伝統的な町並みを「3新しい町」、「4るつぼ」、「5にぎわい」、「6かわばた」、「7古い町の芯」、「9水のまち」、「12へそ」といった具合に14の「構成体」に分節し、将来的な土地利用やランドスケープを提案している。

リンチの研究はボストンをはじめとして西欧の都市にデザインの原理が内在し、それを上手く取り出すことで新しい都市デザインが可能であることを示した。日本の研究者らはリンチに触発され、自国の伝統的な都市景観にも現代の都市計画に生かせるデザイン原理が内在していることを願い、古い町並みの調査研究にとりかかったのである。彼らを突き動かしたのは、センチメンタルな懐古趣味ではなく、近代を超克する創造の原理の探求であったといえよう。

60年代後半のデザイン・サーヴェイの盛り上がりと同時期に、高度経済成長による乱開発から伝統的町並みを守る運動が開始される。そして、1973年のオイルショックと共に高度経済成長が終焉し、幾度かの好景気を迎えたものの、地方都市の中心市街地は軒並みシャッター商店街化していった。これに伴い、多くの地方自治体では、それまで放置してきた古い町並みを文化財として見直し、ローカル・アイデンティティのコアに見立てたのである。つまり、経済成長と乱開発から伝統的な町並みを守るのではなく、経済成長を辛うじて促す観光資源として伝統的町並みが活用される事例が増えたのである。仮に文化財以外に海産物や農産物などの魅力的なコンテンツがあれば、それを糧に経済と文化が活性するわけで、文化財をコアとしたローカル・アイデンティティは人為的な「都市のイメージ」に過ぎず、何度でも交換可能なものである。

ローカル・アイデンティティの効用として、大震災や経済不況など、地域が危機的な局面から回復する際に求心的な役割を果たす。更に平常時には、住民らの無意識を表象する「都市のイメージ」となって、地域経済と地

域文化を突き動かして行く。しかしながら、ローカル・アイデンティティは地域内の年功序列や居住地域内外の差別意識によって支えられていることが多く、排他性を内在し、地域の活性化に不可欠な他者の参入を拒みがちである。

ここからは「蔵の街とちぎ」におけるローカル・アイデンティティに関する研究成果の一部を紹介する。

栃木市のローカル・アイデンティティを考えるにあたって不可欠なのは、かつて 11 年間だけ栃木市が栃木県の県庁所在地であった、という史実であろう。1873 年(明治 6 年)、宇都宮県と栃木県が合併し、現在の栃木県が姿を現し、県庁は栃木町に置かれた。しかし、1884 年(明治 17 年)、栃木県令に着任した三島通庸は県庁を宇都宮町へ移転することを決める。1893 年(明治 26 年)の栃木商工会議所の発足と、それを祝う山車祭りは、傷ついた栃木市のローカル・アイデンティティを回復させる重要な祭礼であったと考えられる。

それから半世紀を経て、オイルショック後の 1975 年頃、栃木旧中心市街地が「蔵の街」であった、という自己認識が語られ始めた。2000 年にはアーケードが外され、「蔵の街大通り」が整備されたが、当時の地元住民は栃木旧中心市街地が蔵の街並みであったことを「蔵の街大通り」整備後に実感している。更に 2012 年には嘉右衛門町地区が伝建に指定されたことで、栃木が遥か昔から一貫して「蔵の街」であった、という幻想を産み続けるのである。

ここで「日常－イベント／経済－文化」というマトリクスを設定し、中心に「蔵の街とちぎ」をすえることで、栃木のローカル・アイデンティティの一断面を切りとってみたい。まず、「蔵の街」を保証する物理的な実体として、「蔵の街大通り」と見世蔵が軒を連ねた景観が挙げられる。こうした街並みを構成する伝統的建造物を用いて商売を営む者もあり、「蔵の街」にちなんだ経済活動が各所で行われている。

一方で、とちぎ秋まつり以外にも、蔵の街かど映画祭、あそ雛まつり、クラモノ。など様々なイベントが蔵をフックとして企画立案され、NPO、近隣の高等教育機関がそれらを支援している。こうした文化的な試み自体が、街並みのフィジカルな保全と並んで、ローカル・アイデンティティを承認する作業であった、といえる。

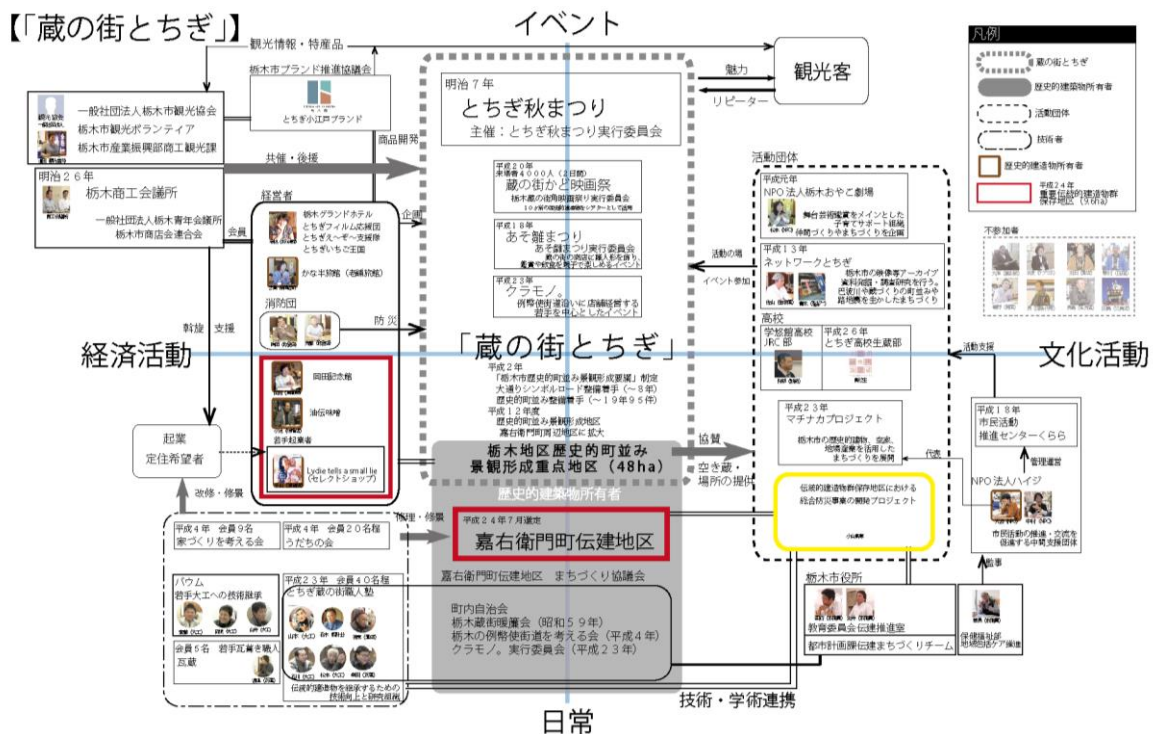


図3 「日常－イベント／経済－文化」のマトリクスから見た「蔵の街とちぎ」

参考文献

- 1) ケビン・リンチ: 現地調査から引き出されたボストンの視覚的形態、都市のイメージ、岩波書店、p.22、1968 年 9 月
- 2) 田中滋夫: 高山のアーバンデザイン、都市のイメージ(ケビン・リンチ著)、岩波書店、p.272、1968 年 9 月